幼稚園における歌唱の指導

玉井紀子

(一) 歌唱指導の際に、考えねばならないこと

幼児は、うたが好きです。うたいたくなると、いつでも、どこでもうたいだします。「鉄人ごっこ」をして遊んでいる時、テレビ番組の鉄人28号のテーマ・ソングを口ずさみ、コカコーラのびんや、広告をみつけて、「パッとさわやか、コーカコーラァー」というコマーシャルソングを口ずさみます。

幼児が、うたをうたうときは、必らず、何かがきっかけになって、うたがうたいたいという気持ちがおこったときです。つまり、動機づけがあって、はじめて、うたうという行動になるのです。「鉄人28号」を例にとれば、その子は、テレビで「鉄人28号」を見ることが楽しくて仕方がない。だから、その番組の前後にうたわれるテーマソングも自然に覚え、その歌まで大好きになり、「鉄人ごっこ」がはじまるとそのうたをうたうのです。

このような動機づけは、幼児が、自由に遊んでいる時には、幼児自身の心の動きにまかされていますが、幼稚園においては、保育内容の一部として、つまり、六領域の中の音楽リズムの一環として、歌をうたうことがとりあげられているので、教師が、ある保育的意図をもって、「歌の時間」を設け、指導にあたることになります。極端ないい方をすれば、幼児が、うたいたくない時にも、うたいたいという気持ちをおこさせてうたわせなければならないのです。そこに、幼稚園における歌唱の指導の難しさがあり、保育者としていろいろと考えなければならないのだと思います。

「どうしたら、子どもたちにうたいたいという気持ちをおこさせる

か」が、指導にあたる先生方の一番の悩みの種ではないかと思われます。教師が、カリキュラムに組んだ歌を、何が何でも、今週中に、教えてしまいたいと考え、子どもの気持ちを無視して「さあ、覚えましょう。うたいましょう」式に、いきなり、教師が模唱し、一節ずつ区切って、復唱させて教えるやり方をしていたのでは、幼児は、少しも楽しくなく、興味も一向にわかないでしょう。そのような指導では、覚えるのも遅いという逆効果を生みます。何回もくりかえし、うたっていれば、確かに、いつかは、うたえるようになります。けれども、それでは、幼児自身の中で、うたが生きているとはいえません。いきなり「うたいましょう」式の指導の場合は、教師が幼児に、作品としての歌を押しつけたにすぎないのではないでしょうか。歌唱能力が完全にそなわり、技術的にも、自分の声を充分駆使できるようになった、中学・高校生においては、そのようなことも意義がありますが、まだ、完全に歌唱能力が発達していない上に、自分の気持ちを、セーブすることができない幼児期に、そのような強引な方法を用いることは、あまり効果があるとはいえません。

子どもたちが、新しいうたを覚えたり、聞き覚えのあるうたや、よく知っているうたをうたうときには、うたうことに対する動機づけが非常に強いことが大切ですが、それには、歌を、作品として与えるのではなく、作品としての歌に関連のある体験をすることです。作品としての歌を媒介にして、身体表現をしたり、ゲームをしたり、劇あそびをしたり、お話し合いをしたり、レコードをきいたり、いろいろな体験をします。そして、それらの体験を通して、歌という作品が、その子どもの心の中に、深く印象づけられ、内面的にも充実することができます。

幼稚園における歌唱指導についての基本的態度を以上のように考えますと、「歌唱」の指導というよりも、「歌唱体験」の指導といった方が適当かも知れません。

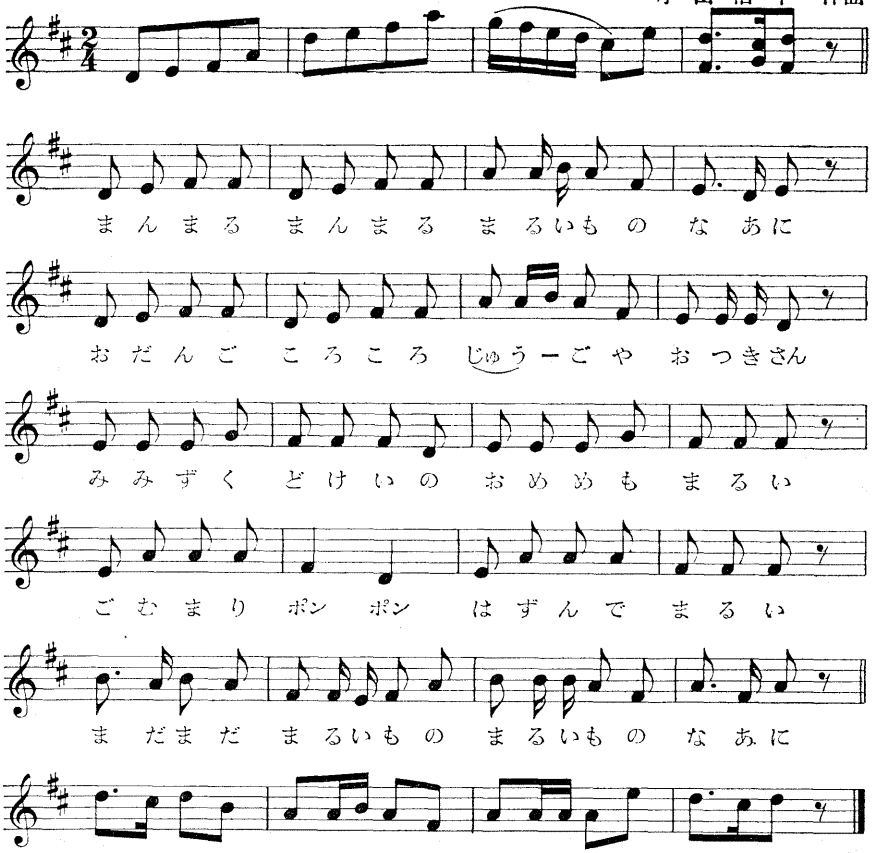
幼稚園においては、幼児が、心から楽しんで、のびのびと自由に、自然にうたうことができればよいと思います。むやみにどなったり、のどをつめたりする不自然なうたい方には注意をしますが、だからといって、発声をとりあげたり、完璧な歌唱技術や、芸術的表現を要求することは、強いて必要ないと考えます。ただ、発表会の形式をとる場合には、技術的、芸術的に、少し程度の高いものが要求されますが、この場合も、それを習得する過程において、前述のようなことが留意された上で指導されることが大切です。

(二) 動機づけとなる体験の仕方

歌詞の内容、或るいは、題材に興味をもたせることがその中心・(時には、メロディやリズムのおもしろさ、楽しさに興味をもたせ

1. まるいもの　なあに

サトウ・ハチロー 作詩
小出浩平 作曲



る場合もある）ペープサート、お話、身体での自由表現、ゲーム、自然観察、レコード鑑賞、など。その内容（題材）により、最も効果的な方法を、教師が判断して、とりあげます。

次に、私が、保育にたずさわっていたこの一年半の間に行なった歌唱体験の指導のうち、子どもにとっても、私にとっても、心に印象深く残っている歌について、保育日誌をもとにして、まとめてみました。なお、これらはみな、最後に、発表の形式をとりました。

㈢　実際の指導例

① まるいものなあに（楽譜1）

×月×日

歌詞の中にでてくる十五夜お月さん、おだんご、耳ずく時計、ゴムまりの絵を画用紙に描いたものを見せ、まるいもので、他にどんなものがあるかを皆でいっしょに考え、なぞなぞあそびのようにしてあそぶ。タイヤ、みかん、りんご、顔、メロンなど、たくさん答えがでる。次に、動作をつけてうたう。少し長いので、歌詞が覚えにくいらしく、うた声にはならないが、一生懸命おぼえたいという表情が手にとるよう。二組にわかれ、向かいあって、「まるいものなあに」と問う組と「十五夜お月さん……」と答える組になって、先生のうたをきいて、動作をすることを主にしてあそぶ。

×月×日

オルガンをひき出すと、すぐ、喜んでのってくる。今日は、先生が質問のところ（まんまるまんまる丸いものなあに。……まだまだまるいものまるいものなあに）をうたい、子どもたちが、答えのところ（おだんごころころ～ゴムまりボンボンはずんでまるい）をうたう。後奏で、先生がこどもを指名し、何かまるいものを考えて答えさせる。三～四回、こうしてあそぶ。

×月×日

二人一組になって、うたいながらあそぶ。ほとんどの子が、歌詞もメロディも覚える。

×月×日

先生が問いかけのところを、うたい、こどもたちが答えのところをうたい、後奏で、先生の指名した子が答えるという方法であそぶ。

×月×日

発表会のために、問いかける子（2名）、答える子（11名）、うただけうたう子（39名）をきめて、各々の役割をとってあそぶ。以後発表の日まで数日にわたって、上手になるまで練習。

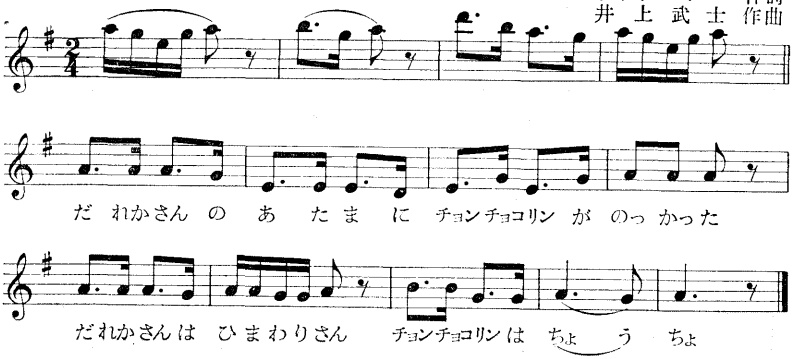
② 誰かさんの頭に（楽譜2）

○月○日

4日前に、お花を製作する。そのことにつなげて、お花にちょうちょがとまりにくるお話をし、興味をそそり、ちょうちょとお花の

2. 誰かさんの　あたまに

サトウ・ハチロー作詩
井上武士作曲



伴奏省略、歌詞も一番のみ記載

好きな方になって、曲にあわせて、自由に身体表現する。曲が終った時、ちょうちょはお花にとまることをルールにする。子どもたちはうたわず、先生のみがうたう。

○月○日

前回と同じ方法であそぶ。今回は、ちょうちょになる人は、お花になっている人で、ちょうちょにとまられた人がなる、というルールを徹底させる。チョンチョコリンの意味がよくわからないらしいので、頭にリボンをつけていた子の、リボンを例に説明する。やっと、このうたのおもしろさがわかった様子。一層、興味を示す。あそびをやめてうただけうたう。

○月○日

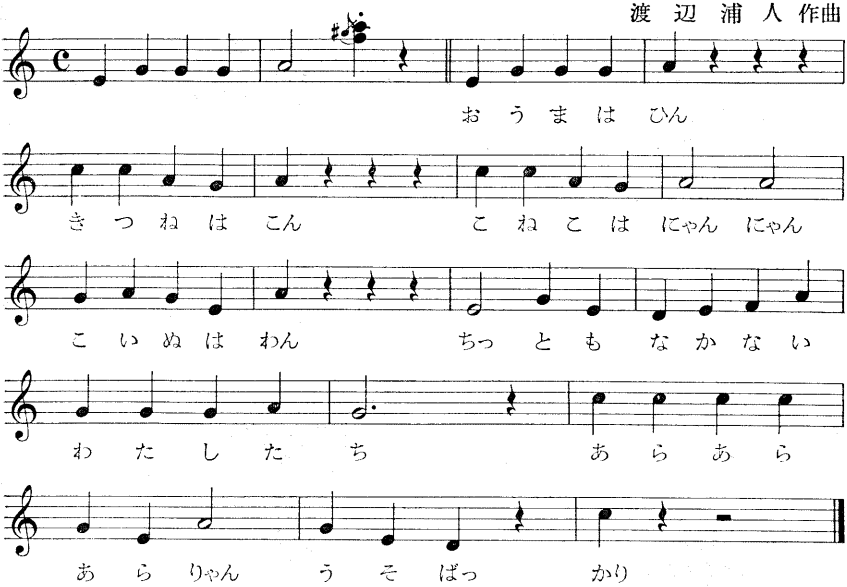
うただけうたう。歌詞のはっきりきこえないところを正し、正確にうたえるようにする。

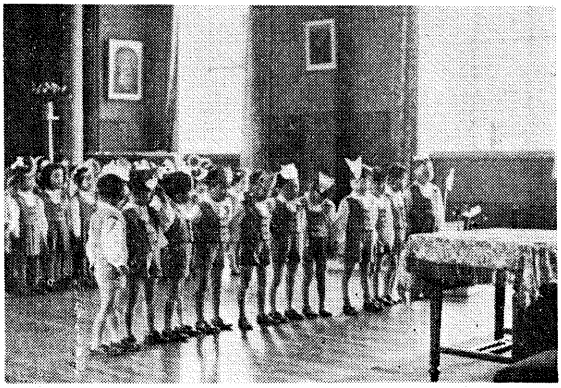
○月○日

発表のために、一番最初、ちょうちょになる人（2名）と、ひまわりになる人（13名）、うたう人（37名）をきめて練習する。

3. おうまは　ひん

サトウ・ハチロー作詩
渡辺浦人作曲





以後、スムースに上手になるまで練習。

③　おうまはひん（楽譜3）

△月△日

動物カード（表に、動物の絵が描いてあり、裏に、その動物についてのお話が書いてある）を使って、動物のお話をする。馬・きつね・こねこ・こいぬの鳴き声のまねをさせる。先生がうたい、なき声のところだけ、子どもたちにいわせる。何回もしているうちに、自然に子どもたちもうたいだす。

数日、同じ方法であそぶ。

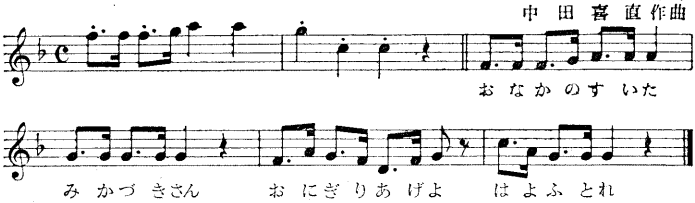
その後……

△月△日

役割（馬4名・きつね4名・こねこ3名・こいぬ3名・うたう人38名）をきめ、動作

4. おなかのすいた　みかづきさん

サトウ・ハチロー作詩
中田喜直作曲



をつけてあそぶ。

④　おなかのすいた三日月さん（楽譜4）

□月□日

満月・半月・三日月の三種類のお月さまと、おにぎりを画用紙にくれよんでかいて切りぬき、月がだんだん欠けて、細くなっていく様子を、実際にやってみせる。

そして、どうして、細くなるのかを子どもたちにたずねる。いろいろと出てくる答えに先生がうなずきながら、最後に「きっと、おなかがすいたからなのネ」といって、詩にむすびつけ、うたってきかせる。次に、先生が三日月になり、子どもたちが、おにぎりをつくる役になってあそぶ。

□月□日

二人一と組になり、三日月と、おにぎりをつくる子になってあそぶ。役割をときどき交代しながらあそぶ。この時は、もうたいながらあそべる子も、かなり多ぜいいる。

□月□日

オルガンをひき出すと、自発的に、お友だちと組んで、うたいながら、あそぶ。

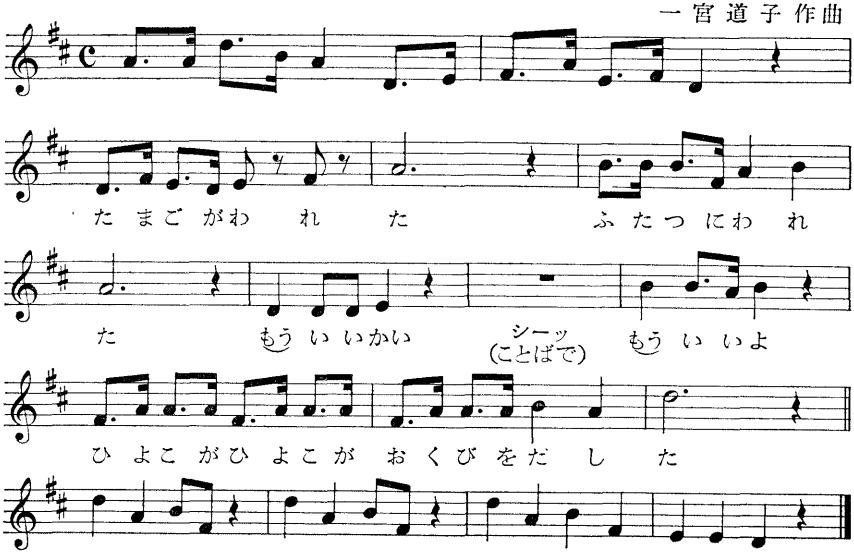
□月□日

うただけうたう。きれいに、はっきりとうたうように指示。

□月□日

5. ひ　よ　こ

宮中雲子 作詩
一宮道子 作曲



発表のために、役割（三日月と子どもとうたう人）と組みあわせをきめて、練習する。

以後、発表の日まで、練習。

⑤　ひよこ（楽譜5）

×月×日

紙芝居「動物の親子」をする。主人公が、にわとりとひよこ。そのあと、ひよこになって、身体で自由表現。その時ひよこの曲を流す。お部屋の広さの関係で、七人位ずつひよこになり、その他の子は拍手する。先生は、オルガンをひきながら、うたっている。「もういいかい、シーッ、もういいよ」のところだけ、みている子がうたう。

×月×日

歌詞をはっきりと覚えられるようにするために、うたをうたうまえに、ベープサートを使って、卵のからが割れて、中からひよこが首を出すところを演じてみせる。なるべく、歌詞（もういいかい、シーッ、もういいよなど）をそのまま活かすようにして話を進める。次に、うたいながら、ベープサートを動かしてみせる。卵のからがわれて、ひよこが首を出す様子が、ベープサートを使用すると、非常に効果的でおもしろく、前回以上の興味を示し、歌うことに積極性を示す。そこで、メロディーをつけないで、ことばをリズムどおりにつけて、少しずつ先生のあとについて口誦する。次に、

四小節ずつ区切って、先生のあとについて復唱。最後に、全体を通してうたう。

その後、朝・お帰りのときに、ときどきうたったり、自由表現してあそぶ。

×月×日

他の組の先生をお客様に迎え、うたってきいていただく。ほとんど全員が、メロディー歌詞ともに、ほぼ正確にうたえる。

×月×日

ひよこ(一名)、たまごのから(二名)の三名が一組になり、役割をきめ、七組つくる。その他、うたう人十名。

その後、発表の日まで、うたう人は元気よくかわいらしく、おゆうぎの人は、楽しそう

6. ガソリン　スタンド

神沢利子　作詩
一宮道子　作曲

ぶうーぶうー　じどうしゃ　かけっこ　したら　おなかが

すいたねー　ごはんを　あげよう

よ　ガソリン　スタンド　で　ー　しゅ　ー

しゅ　ー　しゅ　ー　しゅ　ー　しゅ　ー

〈註〉 1～5　チャイルド本社発行　サトウハチロー戸倉ハル共著「子どもの歌あそび」より
6　フレーベル館発行　日本幼稚園協会編「幼児のうたあそび」37年度版より　伴奏略　歌詞一番のみ

にするように指示。練習する。

⑥　ガソリンスタンド（楽譜6）

△月△日

日頃から、おもちゃの自動車にのって遊んでいるので、その話から、自動車について話し合いをし、最後に先生が、人間に例えながら、自動車も走るとお腹がすいて、ガソリンのごはんを食べる。そして、ガソリンスタンドが、自動車の食堂でもあり、お風呂でもあり、病院でもあることを話してきかせる。そのあと一通りうたを歌ってきかせる。「シューシューシュー」のところだけ、ガソリンを入れる真似をしながら先生と一緒にうたう。数回くり返す。

△月△日

八名ずつ自動車になり、あとの人はガソリンスタントになって、うたをうたい、「ガソリンスタントー」で、自動車が、好きなガソリンスタンドのところにとまって、ガソリンを入れてもらう。次に、自動車とガソリンスタンドとが交代して、同じようにして遊ぶ。そのあとで、自動車とガソリンスタンドのうち、好きな方を、画用紙に描く。

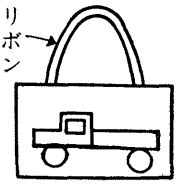
△月△日

前日子どもたちが描いた自動車とガソリンスタントの絵に、リボンをつけて、首にかけるようにしておく。それを首にかけて、ガソリンスタンドと自動車になってあそぶ。大喜びで楽しんでする。

△月△日

うただけうたう。伴奏がメロディーと少しちがうので、伴奏をつけるとうたいにくそうなので、メロディーだけオルガンで弾き、それにあわせてうたう。

短調の曲でむずかしいので、その後、毎日保育の中に入れて歌う。歌っている時、無意識で「シュー」の部分になると、ガソリンを入れる動作をする子が、たくさんいる。



△月△日

発表のために、ガソリンスタンド（1名）と自動車（1名）を一組にし、五組つくる。以後、発表の日まで練習。

（備考）

①～④は、38年3月、卒園式のアトラクションにおいて、「うたあそび」として発表。指導者は2名。幼児は、4才児52名。動作をつけて演ずる事と、歌を歌う事とを別々にする。全員、必らずどれか一つの歌を演し、三つの歌を歌うことになる。

⑤～⑥は、39年6月・聖心女子学院の行事「校長様のお祝い日」において発表。4才児31名。指導者1名。動作をつけて演ずる事と歌を歌う事を別々に行なう。

㈣幼稚園でうたわれる歌

㈢にあげた歌は、みな、同じ傾向の歌です。つまり、どの歌も

(イ) わかりやすい動作がつけられ、おゆうぎをしてあそぶのに効果的である。

(ロ) 役割をとってあそぶことができる。

(ハ) 子どもたちに、あまりよく知られていない。

(ニ) 題材が、子どもの興味を誘うのに適当である。（子どもらしい題材である）

ということが特徴としてあげられます。

このような傾向の歌だけが、幼稚園でうたわれているのではなく、もっともっといろいろな傾向の歌が、たくさんあります。

(1)、「おはようのうた」「さよならのうた」などはあいさつのうた。集合したり、整列したり、体型をつくったり（円陣・二列縦体など）する時にうたう歌――これらはみなことばをメロディにのせ、他人に、自分の意志を伝えることが主な内容なので、仮に、伝達的歌とよびます。

(2)、「ロンドンブリッジ」「ずいずいずっころばし」「花いちもんめ」など、ゲームと密着した歌――これらをゲーム的歌とよびます。

(3)、「大きな栗の木の下で」「出してひっこめて」「ひらいた」その他、ふつうの歌に動作をつけてお遊戯にしてあそぶ歌――これらを舞踊的（ダンス的）歌とよびます。

(4)、動作も何もつけないで、うたうこと自体を楽しむことを主とした歌、例えば、「とんぼのめがね」「シャボン玉」「聖歌」など、動作をつけないでうたった場合の歌――これらを純歌唱的歌とよびます。

このような分類の仕方は、具体的な歌によって分類されるのではなく、その歌が、何を中心にして用いられているか、その用いられ方による分類の仕方です。ですから、一つの歌が(3)に分類されることも、(4)に分類されることもあります。

このように用いられ方が異なれば、その指導の仕方、体験のさせ方も、当然異なってきます。

㈢の実際指導例としてあげた歌は、(3)に分類され、幼稚園でうたわれる歌全部の指導に通用するものではありません。

実際に、保育にたずさわっていらっしゃる先生方の、豊かな経験を充分に活用して、指導にあたられることを期待すると同時に、何か、よい指導法がありましたら、この誌上で、お知らせ下さいますようお願い致します。

（聖心女子学院幼稚園）

＊　＊　＊